



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このほかに、「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽二の十二の十三

光文社

神吉晴夫

日本人の知恵=1 徒然草入門

昭和42年9月1日 初版発行

検印廃止 290

著者 本多 顯彰

東京都杉並区阿佐谷北 3-31-7

発行者 神吉晴夫

印刷者 磨田照雄

東京都文京区水道 2-4-26

慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社  
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

(岩淵製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Akira Honda 1967



■吉田兼好像（京都・長泉寺蔵）二

十歳のころ宮仕えをやめ、三十代にはいるころ、すでに自由な出家人となつたといわれる。その後、修学院にこもつたり、比叡山横川に隠棲したりした。が、現世を捨てきれない多感な兼好は、四十代を迎えるころ都に帰り、和歌四天王の一人として活躍した。

当時は、元弘の変・建武中興・南北朝の争乱と、日夜血なまぐさい戦乱の世であつた。加えて、飢饉、疾病、火災、地震などの災害も絶えなかつた。そうした明日をも知れない動乱の中で、「人生の無常」を感じた兼好は、きびしい現実に積極的に対処する人間のあり方を追求し、日本古典中の名著『徒然草』を完成した。兼好の四十代末（元弘元年、一三三二年）のことだといわれる。



■仁和寺 双ヶ丘の北ふもとにある古義真言宗の大本山。『徒然草』には、当時の名の知られた社寺を舞台にした話が多いが、その中でも、仁和寺の場面がもつとも多く、有名である。とりわけ、仁和寺のちごや法師の失敗談・こつけい談がユーモラスに語られた個所は、兼好のユーモリストとしての一面をよくあらわし、読者を思わずニヤリとさせずにはおかない(本文二二二〜二二七ページ参照)。

↓  
 ■化野念仏寺

当時、京都の西、嵯峨野の奥一帯の「あだし野」は、死体を風葬する共同墓地であった。だから、『徒然草』にも出てくるように、「あだし野の露」と「鳥辺山の烟」とは、世の無常をいうとき、つねに使われる、いわば、「枕

ことば」であった(本文二三ページ参照)。念仏寺の石仏群は、当時の捨てられた無縁仏と関係があるといわれるが、はつきりしたことはわからない。





↑  
 ■双ヶ丘

兼好は、四十代の末、この双ヶ丘のふもとに庵を結んで住み、『徒然草』を完成したといわれる。写真は、左から一ノ丘、二ノ丘、三ノ丘で、うしろは大文字山である。

■鳥辺野

西の化野に対し、京都の東、東山にあった死体捨て場・火葬場。当時の庶民の死体は、鴨川に流す水葬か特定の場所に集めて捨てる風葬であった。その墓地としてもっとも大きく、有名であったのがこの鳥辺野である。ここでは、一部の火葬・土葬のほかはほとんどが風葬のため昼でも、捨てられた死体をあさる野犬の群れがうろついていたという(本文二二三ページ参照)。

写真(西大谷の墓地)のように、当時の名残りが西大谷の一部に、わずかだが残っている。

■兼好の墓 双ヶ丘の東ふもと、御室岡ノ裾町の長泉寺にある。江戸時代末期、兼好をしのんでつくった自然石の墓である。

その横に、歌碑が建っている。兼好が自分の庵に桜の木を植えたときの歌「契りおく花とならびの岡の上に 哀れ幾世の 春をすぐさむ」が彫りつけてある。



日本人の知恵 Ⅱ 1 古典に現代を発見しよう

つれづれぐさ  
徒然草入門

本多顯彰著



*Kappa  
Biblia*



『徒然草』は、数十年前、中学の生徒であったころ教室で読んだのが最初で、その後も折りにふれて目をとおしていた。そうするうちに、若いころ、私の頭の中にあつた『徒然草』がとんでもないものであつたことがわかつてきた。

『徒然草』は中学校では試験問題集のようにして教えられたし、教科書に抜粋ぼつすいされている部分は、かならずしも『徒然草』を代表する文章ではなかつた。

そこで、ほかの人のことは知らないが、私は『徒然草』というと、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは（桜の花は真盛りの花だけを、月はくもりもなくこうこうと照っている月だけを見るべきだろうか）」（第三百三十七段）といったような、ひねくれた、裏返し観察をのべた随筆集という印象を受けていた。ひねくれた見方では、ものの奥底の真実をとらえることはできない。奇矯きこうの言辞によつて人を驚かすことはできても、深いところで心をゆすぶることはできない。若いころ、そう私は考え、『徒然草』に強く魅ひかれるということではなかつた。

ところがくりかえし読むうちに、著者吉田兼好よしたかねこうがそんな軽薄な坊さんでないことを知つた。当

時は出家することが大ばやりだったそうで、ニセものもなかなか多かつたらしいが、同じニセものでも兼好のは他と大違いだ。彼は空しく出家したのではなかった。出家は、いうまでもなく、家を捨て、妻子を捨てて仏道にはいることだ。が、いっさいを捨てることは清水の舞台から飛び降りることであつて、いっさいを失うことによつて、滅びない真実に向かつて目を開くことだ。それを徹底させれば、本来の無一物に帰し、さとりを開くわけだろう。しかしそうなつたら娑婆への執着はどうなるのだろう。しかも、その執着がなくなつたら、もはや文学は書けまい。

ところが、兼好法師は、いっさいを投げ出すことによつて、真実に向かつて目が開くと、回れ右をして、今度は、新しい目でもつて、捨てて来た娑婆をながめ直しはじめた。天の橋立勝眼鏡である。そうすると、生まれつきよく見える目であつた目が、さらにさえ、さらに鋭く光つた。『徒然草』は、そういう目に映つた娑婆のながめなのである。

鋭い目がたしかにとらえたのは人生の無常である。その無常観は、『平家物語』を貫いているようなセンチメンタルな、弱々しい無常観ではない。兼好の無常観は、人生が無常であり、生命は一とかぞえる間もないものであるならば、いたずらにおびえおのくのではなく、一刹那を精いっぱい生きよ、というのである。一刻後に死ぬのなら、今の一刻を緊張して、悔いなく生きなければならぬ。

彼の『徒然草』には、自然観照ものべられているけれども、それは重要ではない。なかには、鋭い感覚でとらえた自然の描写もあるが（たとえば第五段、本文一七八ページ参照）、この本

の最大の特色は、たくましい人生観にもとづいた人生訓である。

兼好は、その人生訓を、道徳家の説くように抽象的言辞ではけっして説かない。彼はかならず、はなはだ具体的に説くのである。というのは、彼の人生訓は、彼自身の体験によって自己証明されたものであるからである。彼がさずける知恵は、生活から直接来た知恵であるから、ぬきさしならぬものである。

こういうと『徒然草』が、そうおもしろくもない道徳の書であるという印象を与えるかもしれないが、けっしてそうではない。出家して途中から引き返したということのやましきから、彼は自分自身を叱るかのように、厳しい求道精神を力説する。が、娑婆しゃばに、とくに女色みれんに未練たつぶりなところから、物わがりの悪いことはけっして言わない。弱いことを言ったり、強いことを主張したりして、われわれをまごつかせる、そこが、なんとも言えずおかしく、味わいがあるのである。

この本にのせた原文は、すべて、西尾実校訂『徒然草』から引用させていただいた。ただし、読みにくい漢字には、私がふりがなをつけた。

昭和四十二年八月一日

本多 顕彰

# 目次

まえがき……………七

I たくましい無常観……………一五

- ▽兼好けんこうと長明ちやうめい (二七) ▽俗世を捨てて、はじめて俗世を知った兼好 (二六)
- ▽きびしい無常観 (三三) ▽人間のはかなさ (三三) ▽いのち長ければ恥多し (三三)
- ▽老醜 (三四) ▽無常迅速 (三六) ▽老いて悔ゆとも、すでに遅し (三六)
- ▽求道は常に火急の事 (三六) ▽大事の前には小事を捨てよ (三三)
- ▽人生は常に火急だ！ (三六) ▽あくせく働くばかりが、人生ではない (三六)
- ▽余談に耳を傾けるひまなし (三六) ▽断固として、雑俗事を切りすてよ (四〇)
- ▽いつやってくるかしかない「死の順番」 (四二) ▽何事も、潮時などというものはない (四三) ▽きびしい無常の現実 (四七) ▽本末をあやまるとき (五三) ▽最重要の事だけを専心はげむべし (四五) ▽一時のなまけは、一生のなまけに通ず (五五) ▽万事を犠牲にしないでは、一つの大事も成しとげられない (五五) ▽人生は不定である (六二) ▽あらしは、いつ吹くかもしれない (六六) ▽二本の矢を持つな (六七) ▽寸陰を惜しめ

(六六) ▽法然と念仏(七三) ▽一瞬、一瞬を精いっぱい生きよ(七五)

## Ⅱ 「人生の達人」の知恵

——この現実を最高に生きる道

七

▽松下禪尼の節儉(七九) ▽簡素な生き方(八二) ▽友人をえらぶ十のポイント(八二) ▽社交の心得(八四) ▽上手な会話、下品な会話(八七) ▽知ったかぶりは、田舎者のすること(八七) ▽おろかなり、名利に追われる人生(九〇) ▽億万長者になる法(九三) ▽大欲は無欲に似たり(九五) ▽のどかな人生(九六) ▽理想の修行僧(一〇〇) ▽世をのがれる意義(一〇二) ▽人間の生きる道(一〇三) ▽法師をしかる(一〇四) ▽ある法師の人間味(一〇五) ▽うそを言わなければ、生きていけない世の中(一〇六) ▽孤独の中でのみ、真に独創的でいられる(一〇八) ▽専門外の勉強(一一三) ▽武士商売のつらさ(一一三) ▽「しのこし」の美学(一一四) ▽最高位に登れば、あとは落ちるしかない(一二六) ▽「物真似」の効用(一二七) ▽命の刻々を最高に、そして緊張して生きよ(一二八) ▽人生の成功者と失敗者をきめるもの(一三二) ▽勝負に勝つ秘訣(一三三) ▽分を知ること(一三三) ▽己を知ること(一三六) ▽他人のことに口ばしを入れるな(一三九) ▽物に争わず(一三九) ▽捨てる決意を持って(一四三) ▽「子孫のために美田を買わず。」(一四五) ▽臨終の姿(一五三) ▽一芸に秀でる方法(一五三) ▽五十歳は人生の転機(一四四) ▽形を軽視するな(一四三) ▽はかない人間の営み(一四五) ▽長所は短所に通ず(一四六) ▽能ある鷹は、ほどほどに爪をかくせ(一四九) ▽近くを大事に

### III ゆうゆうたる人生

- (二五二) ▽若き情熱の日に (二五三) ▽盲へびに怖じず (二五四) ▽努力と才能
- (二五五) ▽万事頼みにしてはならない (二五七) ▽演技過剰はつつしむこと
- (二五九) ▽すべて人は、無知無能であるべきだ。」 (二六〇) ▽美しい言葉
- (二六三) ▽吉凶は人によりて、日によらず (二六五) ▽拾遺 (二六七)

一六九

### IV ユーモアの秘訣

- ▽色道の極意 (二七二) ▽久米仙墜落 (二七三) ▽女性の魅力 (二七五) ▽女のたしなみ (二七五) ▽寒夜の逢引き (二七六) ▽男にきらわれる女性の条件 (二七八)
- ▽さっぱりした女 (二八三) ▽独身主義のすすめ (二八四) ▽酒呑みの悪癖 (二八七) ▽だらしない酒の飲み方 (二九〇) ▽すてがたい酒の味 (二九三) ▽時頼の宵酒 (二九四) ▽あるじの趣味 (二九六) ▽空の名残り (二九八) ▽家の作り方 (二九九) ▽庭木のこと (二九九) ▽草木と対話する生活 (三〇〇) ▽自然を楽しみ、自然を友とする人生 (三〇三) ▽「いと小さきものになせることは、わがためになせるなり。」 (三〇六) ▽心痛は万病のもと (三〇七) ▽住まい・調度は人間を作る (三〇八)

二二二

- ▽ユーモアに富んでいたシェイクスピア (三三三) ▽人生そのものがユーモアだ (三三四) ▽ユーモリストは、すべて人生の達人である (三三六) ▽あだ名の効用 (三三七) ▽読みにくい名前から起こる悲喜劇 (三三〇) ▽知ったか

ぶり(三三)▽かなえをかぶったちぢ(三三)▽あまりに興あらんとする  
(三六)▽安くあがるニセ物愛蔵(三七)▽猫またの正体(三六)▽頭か  
くして尻かくさず(三三)▽知らぬが仏(三三)▽人を見て法を説け(三三)  
▽ユーモアの神髄(三三)▽生兵法は大疵のもと(三三)▽きわどいいた  
ずら(三三)

むすび……………三完

本文イラスト・村上  
豊

I たくましい無常観

